

# 蘭陵荀子墓探訪記

池田知久

## I 始めに

今年（二〇〇四年）三月二十七日（土）より四月三日（土）までの八日間、筆者は中國山東省濟南市にある山東大學（主として文史哲研究院）を訪問した。この訪問旅行は、山東大學展濤學長の懇篤なる公式の招聘を受け、また大東文化大學より若干の物質的援助を受けて實現したものである。今回の訪問は、筆者にとって、以下に紹介するように學問上の多くの收穫があつたが、展濤學長の招聘と大東文化大學の援助がなかつたならば、實現しなかつたにちがいない。ここにこの場を借りて、展濤學長および大東文化大學に深甚なる感謝の意を表明したい。

また、今回の訪問は、同じ職場、大東文化大學文學部中國文學科の原孝治教授とともに行ったものである。この間の二人の訪問旅行は飛行機への乗り損ないあり、日程の変更あり、危ない冒険ありで、彌次喜多道中さながらであったが、結局のところ、山東大學の周到な準備と配慮もあって、大過なく任務を完遂することができた。これは、根底に大東文化大學と山東大學との學術交流協定の締結の過去のいきさつがあり、それ以來、山東大學側が原教授に對して協定締結の恩人として深い敬意を拂つて來たためであるが、それにはまた原教授の飾らない率直な人柄、暖かい廣い心によるところが大きいと思う。そのような意味で、陰に陽にお世話になつた原教授に對して心から感謝しなければならぬ。

なお、この蘭陵荀子墓探訪についての報告は、原教授と筆者とで任務を分擔し、それぞれの書く内容を別々に定めて報告書とするものである。

## II 山東大學訪問の概略

### 第一日、三月二十七日（土）

我々二人が日本を發つて山東大學に向かったのは、東京の櫻の花もそろそろ満開になろうかという二月二十七日（土）であった。残り僅かとなった春休みの貴重な時間を利用して、山東大學展濤學長（比較的若い數學者でもある）の公式招聘に應えるためであった。

この日、成田空港より午前十時三十五分發のNH905便に乗り、無事に午後一時三十五分北京に到着。北京空港國際線の到着ロビーで原孝治教授の令息の原誠士氏の出迎えを受けた。誠士氏は、大東文化大學文學部中國文學科を卒業後、廣島大學大學院を出た人で、當時は北京に在住して北京外國語大學の日本語專家を勤めていた。我々は空港内のレストランで暫く時間をつぶした後、誠士氏に別れを告げてチェックイン・カウンターに移動し、午後四時五十五分北京發、五時四十五分濟南着のMU5148便に搭乘すべく手続きを行ったところ、十分に時間の餘裕を見計らってチェックインしたにもかかわらず、このMU5148便は何と十五分以上も前にすでに離陸してしまっていた。

我々は大いに慌てた。しかし、中國の國內便の職員とねばり強く交渉を重ねて、ついに航空券を山東航空の夜七時十分北京發、八時十分濟南着のものに無料で交換してもらうことに成功、そのまま濟南空港に到着した。到着時には、すでに日はとつぷりと暮れていたけれども、山東大學の文史哲研究院の鄭傑文教授（著名な『墨子』の研究者）と國際合

作與交流處處員の劉明利先生（鄭教授の指導下で中國哲學史を研究している同大學大學院生でもある）など三人が待っていてくれた。この間、我々は北京空港内より北京にいる原誠士氏に電話をかけて事情を話し、誠士氏の携帯電話を通じて山東大學側に連絡を取っていたためである。

鄭教授と劉先生のもてなしを受けて、四人で簡単な夕食を取った後、大學差し回しの車で山東大學に入り、山東大學學術交流中心の學人大廈に宿舍を定めた。この學人大廈は、主として國內外からこの大學を訪問する *visiting scholar* や *researching scholar* あるいはこの大學で働く外國人研究者（專家）が宿泊するための、近代的な高層ホテルである。以後八日間、我々二人はここを根城にして様々の學術交流活動を展開した。

## 第二日、三月二十八日（日）

第二日の三月二十八日（日）、朝八時十分、迎えに来てくれた鄭教授・劉先生と四人で學人大廈一階の食堂でバイキング形式の朝食を取った（以後、これが毎朝の日課となる）。その後、二人の案内で大學の車に乗って午前中は八時四十五分〜午後一時の間、靈巖寺を、午後は一時十分〜四時四十五分の間、四門塔をそれぞれ見學に連れて行ってもらった。

靈巖寺は、濟南市南郊の長清區、泰山の西北麓にある廣壯な古刹で、四世紀半ばの東晉時代の建立とされる。最盛時の唐代には四十餘りの殿閣、五〇〇餘りの禪房があって、五〇〇人以上の僧侶が住み、當時は全國「四大名刹」の首と稱されたと言う。

また、四門塔は、濟南市東南郊の歷城區にある（現存のものとしては）中國最古の石塔で、隋の大業七年（西曆六一一年）の創建である。魏晉南北朝時代〜唐代・宋代の佛教遺跡が多く残る柳埠鎮内の東側に位置している。單層の正方

形で、高さは約十五メートル、一邊の廣さは約七メートル、青石砌で作られた美しい佛塔であった。

夕方近くの午後四時四十五分になって見學から山東大學にもどったが、間もなく五時四十分、劉永波處長を始めとする國際合作與交流處の方々が我々のために大學附近のレストランで歓迎會を開いてくれた。我々を含めて七人の参加というこじんまりとした歓迎會であったが、暖かな心のこもった集まりであった（九時四十五分まで）。

### 第三日、三月二十九日（月）

第三日の三月二十九日（月）、午前九時半より鄭傑文教授・劉明利先生の案内で慌ただしく圖書館の善本室を見學させてもらい、十時になってそのまま同じ建物の中にある國際合作與交流處を表敬訪問した。そして暫く経って十一時半ごろ、やはり同じ建物の中にある學長室に赴いて原教授とともに「山東大學客座教授」の任命式の場に臨んだ。展濤學長より我々に一人ずつ「聘書」が授けられる儀式である。その後、十二時〜午後一時の間、學長の接待で晝食をご馳走になり、學長を始めとする山東大學の幹部たちと歡談する機會を得ることができたのは、豫期しない喜びであった。この時、展濤學長の提案により、急遽、翌三十日（火）の夜、筆者が「池田侃老莊」（池田、老莊を語る）という講演を行うことが決まった。

午後は、二時〜四時半の二時間半、筆者が「林希逸『三子庸齋口義』と日本朱子學の形成」という題目で講演を行った。会場は文史哲研究院の教室、聴衆は教員・大學院生・學生など三十人前後、司會は王學典教授（顧頡剛などの歴史理論の研究者）、通譯は劉明利先生である。やや専門的なテーマであるにもかかわらず、相當に活發な質疑應答が行われた。筆者は中國語と日本語を半々に交えて話したが、中國の思想史の研究水準は以前と比べて確實に上がっているという印象を受けた次第である。ちなみに、原教授も最初の内は筆者の講演を聞いていたが、三十分後には他の用件のた

めに會場を去ることになった。

その夜は、五時半〜八時半の間、鄭傑文教授夫妻の接待で歓迎の宴會が開かれた。鄭教授は、筆者がまだ東京大學大學院人文社會系研究科に教授として勤めていた時、二〇〇二年十月〜二〇〇三年三月の間、同中國思想文化學研究室に外國人研究員として招聘したことがあった。また、研究者ではない夫人の來日は手続きが非常に困難であったが、二〇〇三年一月に何とか來日することができるようになって、鄭教授夫妻は東京大學インターナショナル・ロッジの夫婦部屋に宿泊していた（三月まで）ので、お互いに往來する機會が少なくなかったのである。その上この日は、子息も山東大學の事務局に就職が内定したというめでたい話題もあり、宴會は大いに盛り上がって、原教授・筆者ともに久しぶりに鄭教授一家との再會を楽しんだ。

#### 第四日、三月三十日（火）

第四日の三月三十日（火）、午前八時ごろ二人が朝食を取ろうとしている時に、大東文化大學より山東大學に留學中の三人の學生（文學部中國文學科一人、大學院外國語學部中國語學科二人）が訪ねて來た。劉明利先生が學生たちに我々二人を訪ねるようにと手配してくれたものである。我々は朝食をともしながら歡談し、留學生活の中で注意すべき點を話して聽かせたが、これは老婆心ならぬ老爺心であったかもしれない。

八時半になって、二人は劉明利先生の案内で山東大學文學院に赴き、九時十五分〜十一時の間、座談會に参加した。會場は文學院會議室、參加者は劉曉東教授（音韻學・經學・『禮記』）、王承略教授（『詩經』）、劉心明教授、鄭傑文教授（『墨子』）、徐傳武教授（魏晉文學）、蔡德貴教授、馬曉樂女士（魏晉玄學）など十五人程度、司會は文學院院長の王學典教授（歴史理論）である。座談會のテーマは、山東大學古籍整理研究所および文學院の歴史、出土資料を通じて見

る中國古典の成立過程、『墨子』のテキスト整理上の新資料の発見、王弼や郭象などの魏晉玄學の研究方法、などについてであった。一般的に言って、中國では、學術研究の方法としての座談會が日本と比べてはるかに重視されている。この日の座談會もその例外でなく、多岐の諸問題に渉る豊富で高度な内容のものであったが、我々二人と初對面の研究者も多く、遠慮がちにものと言う場面が多かったためであろうか、十分に深い突っこんだ議論はできなかったという不満が残った。しかし、山東大學の中國文化の研究者たちとの學術交流の端緒は、これで何とか開くことができたのではないかと思う。

この日の午後は、二時から原教授が「日本と中國の墨子學」と題して講演を行った（四時半まで）。ただし、筆者は原教授には失禮であったがこの講演をスキップさせてもらって、二時〜四時半の間、姜さんという女子學生の案内で濟南市内に出かけた。中國銀行で日本圓を人民元に換金するためと新華書店で書籍を買うためである。四時半に山東大學にもどると、午前中の座談會で初めて會った王承略教授と蔡德貴教授が宿舎に訪ねて来てくれたので、楽しく雑談を交わした（五時半まで）。その後、五時半〜六時半の間、文學院の王學典院長の主催で、我々のために晚餐會が開かれた。夜七時になって、筆者は「池田侃老莊」（池田、老莊を語る）という講演を行った（八時半まで）。これは上述のとおり、昨日の晝食時に、展濤學長が提案して筆者が受けて立ったものであるが、「山東大學『人文縱橫』系列講座學術報告」の第一回として開かれた。以後、連続して第二回・第三回……が開かれるのだと言う。そして、この講演會の通知はインターネットを通じて山東大學の全學生に伝えられたとのことであった。会場は東區邵逸夫科學館報告廳、聴衆は展濤學長・劉永波國際合作與交流處處長を始めとする教員・大學院生・學生など（自然科學系をも含む）二〇〇人前後、司會は王學典教授、通譯は劉明利先生である。筆者は、老莊思想の最も基本となる「道―萬物」の二世世界論について初步的な分析を行い、併せて老莊思想の眞の目的を解明したが、このような内容の解説は實は中國では行われておらず、

それゆえ學生諸君にとっては理解することが難しい内容であったようである。しかし、講演の後の質問や意見の表明は極めて活發であり、展濤學長は大成功であったと評價してくれた。なお、講演會終了後は、九時～十時半の間、展濤學長・劉永波處長と筆者の三人でビールを飲み交わしたが、後日傳え聞くところによれば、展濤學長はこのために足に痛風の症状が出たとのことであり、筆者としては今も大いに反省している。

#### 第五日、三月三十一日（水）

第五日の三月三十一日（水）、午前九時ごろから鄭傑文教授の案内で、タクシーに乗って済南市内の中國銀行と齊魯書社の發行所に行き、日本圓を人民元に換金して書籍を格安の値段で購入した（十一時四十分まで）。この時間帶は、原教授が『墨子』に關する講演を行っていたのであるが、筆者は再びスキップさせてもらったわけである。

晝食後、午後二時～四時四十分までの間、中國古典文化に詳しい女子學生の王さん（四川省成都市の出身）に案内してもらって、原教授と二人で山東大學博物館と趵突泉公園を參觀した（二時～三時半）。この博物館は元の山東醫科大學のキャンパス内にあり、山東醫科大學は最近、山東大學が吸収・合併してその醫學系に編成替えとなったものである。博物館では古代の齊國・魯國などの遺跡から出土した貴重な遺物をいくつか見せてもらったが、邾國の都城から出土した編鐘の展示物は特に見事なものであった。また、趵突泉公園は、筆者は初めて山東半島を訪れた一九八六年七月以來、今までに數回參觀したことがあるが、來るたびごとにいつも水が涸れていて落膽續きであった。しかし、今回は清冽な水を滿々と湛える「天下第一泉」にやっと巡り會うことができて、眞に幸運であった（三時四十分～四時四十分）。

趵突泉公園から宿舎にもどった後、二人は夕方の五時半より張世響先生夫妻の招待を受けて歡迎會に出席した。張先生は、山東大學哲學系および文史哲研究院の卒業生で、鄭傑文教授の高弟の一人。鄭教授夫妻が來日して東京大學大學

院に在籍していた二〇〇二年十月～二〇〇三年三月の間、張先生も鄭教授に付き添う形で來日し、鄭教授と行動をともにしていた。専攻は「古代における中日関係の歴史」で、東京大學大學院における筆者のゼミナールにも参加していた。こうして我々は約一年ぶりに再會したのであった。なお、夫人は現在、濟南市のある大學で英語の教授を勤めており、かつては在日中、埼玉大學で英語の非常勤講師をしたこともあると言う。筆者とはこの日が初對面であった。張先生の現職は、山東省教育廳外事處副處長であり、極めて多忙な仕事の合間をぬって我々のために歓迎會を催してくれたものである。席上、張先生が現在、「古代における中日関係の歴史」に関する博士論文を執筆中であり、間もなく完成する豫定であることを知らされた。一同が博士論文の完成を祝って乾杯したのは、言うまでもない（九時二十分まで）。

## 第六日、四月一日（木）

第六日の四月一日（木）以降は、山東大學訪問のすべての公式行事が終了して、いよいよ今回の主目的の一つである蘭陵鎮に荀子の墓を探訪する日程となった。この蘭陵という町は、戰國時代には楚國に屬していたから、筆者は、現代中國ではもっと西、もっと南にあるものと勝手に思いこんでいた。それに、日本で發行されている普通の中國旅行案内書にも、また中國で入手したやや詳細な觀光案内書にも、蘭陵のことはほとんど出て來ないのである。ところがある時、何氣なく地圖を見ていたところ、偶然、この町が山東省の最南地帯、臨沂市蒼山縣にあり、その直ぐ南は江蘇省との省境であることを發見した。そこで、原教授とも相談した結果、今回の山東大學訪問の際には是非參觀に訪れてみようということになったわけである。蘭陵という町がなぜ我々の興味をそそるのかと言えば、勿論、戰國時代末期最大の儒家の思想家、荀子が最晩年を過ごし、また死後葬られたのがこの土地だからであるが、その荀子との関わりについては、以下に別に章を立てて詳しく論じたい。ここでは、山東大學訪問旅行の概略の一環として、四月一日（木）～四月三日



(土)の日程を簡潔に述べておく。

さて、四月一日(木)は、午前七時半に朝食を取り、八時四十五分に大學の用意してくれた車に乗って出發した。參加したのは、我々二人を除くと鄭傑文教授と劉明利先生と運轉手の王さんの三人である。地元の彼らですら、荀子の墓に行くのは今回が初めてだと言っていた。高速道路に乗るために車は澁滞の濟南市内を暫く北上して、九時丁度に黄河を渡る。高速道路に乗ってからは極めて順調で、九時四十五分、泰安市を通過、また九時五十五分、大汶口を通過、さらに十時二十分、曲阜市を通過。筆者は山東省を訪れるたびごとにいつも高速道路網の發達ぶりには驚かされてきたが、今回もまた同じ驚きを新たに経験することになった。

十時四十五分、濟寧市に入って高速道路により下り、一般の國道を走って、十一時半、嘉祥縣に到着。その武梁祠の後漢時代の畫像石を見學するのが、荀子の墓以外のもう一つの目的である。嘉祥縣はまた曾子の故郷でもあって、縣の中心に近い國道の傍らには七、八メートルはあろうかという巨大な「宗聖曾子」という現代のコンクリート像が立っていた。「武氏墓群石刻」という石碑が掲げられ、高さ約二メートルのコンクリートの壁で圍われた、武梁祠一帯の敷地には他の武氏祠の殘滓も轉がっていたが、畫像石がまとめて置かれている小さな展覽室は、普段は訪れる觀覽者も少ないために鍵をかけて閉めているようであった。同じ敷地の直ぐ近くに管理室があって、そこで入場券を買うと管理人が鍵を開けてくれる、という手作りの觀覽方法であった。武梁祠の畫像石は日本でも比較的よく知られているので、ここでは紹介を省略するが、伏羲・女媧・神農・堯・舜・禹などの神話・傳説の畫かれた石彫は、今も明瞭に見ることができてやはり秀逸と感じたことであった(十二時半まで)。

その後、濟寧市にもどって午後一時十分〜二時十五分の間、晝食を取った後、二時四十五分、曲阜市に到着した。そのまま市内を車で移動して、宿泊豫定のホテル、闕里賓舎に入った。筆者にとって曲阜を訪れるのはこれで五度目、闕

里賓舎に泊まるのも三度目である。しかし、原教授は今までたびたび山東省を訪れているにもかかわらず、不思議なことに曲阜には一度も来たことがないというので、今回は是非とも曲阜を見學しようということになったのである。暫く闕里賓舎で休憩した後、我々は三時四十分に出發、三孔（孔廟・孔府・孔林）の内、孔廟だけを見學して回った（四時半まで）。姓を孔という若い女性のガイドさんの案内であったが、孔廟を訪問した現代の政治家にまつわる裏話を聞かせてもらったのは、他所では聞けない眞に貴重な體驗であった。この日の活動はこれで終了して、四時四十五分、闕里賓舎に歸った。なお、曲阜の三孔については、周知の名所であるので、ここでは説明をすべて省略する。

#### 第七日、四月二日（金）

第七日の四月二日（金）は、いよいよ蘭陵鎮に荀子の墓を訪ねる日である。我々は朝八時に闕里賓舎を發って、まず昨日見殘した孔府を見學（九時まで）、九時からは孔林に赴いて孔子の墓に詣でた。十時五分、一まずに曲阜市に別れを告げて出發。高速道路を車で南下し、滕州市を経て、十一時二十分、柴胡店鎮邊りで高速道路を下り、一般の國道を東に向かって走った。十一時三十五分、南石鎮を通過、十一時四十三分には、棗莊市内に入り、十二時十分、峨山に至った。ここまでが棗莊市である。

さらに進んで十二時二十分、目的地である蘭陵鎮に到達した。蘭陵鎮はごく小さな田舎町で、棗莊市の隣の臨沂市の西端、蒼山縣にある。町の中心部分の四つ角には、新たに作られた白亞の荀子像が立っていた。我々はそれを見て、目指す荀子墓がもう閒近にあると確信もし安心もした。そして小道・脇道をあちこち探した末に、十二時半、ついに荀子墓を探し當てることに成功した。荀子墓を見學したのは、午後十二時半〜一時十分の僅か四十分閒であるが、我々の感覺ではそれでもう十分であった。一時十分、蘭陵鎮にもどって食堂を探し、そこで晝食となった（二時まで）。

二時、晝食後、再び町の中心の四つ角にある、白亜の荀子像を拜観した後、我々は蘭陵鎮に別れを告げて歸途に就いた。歸りの道は往きとほぼ同じであるが、少し變えた點もある。蘭陵鎮から道を探しながら西に向かって車を走らせ、二時十四分、棗莊市の甘露溝を通過。さらに西して、三時半、薛城區に到達して、ここから高速道路に乗る。以後は極めて順調に進み、四時二十分に曲阜市にもどって暫く休憩した後、六時には濟南市に入り、六時二十分、ついに山東大學の學人大厦に歸還した。

その後、夜七時、展濤學長のところに蘭陵旅行の報告とお別れの挨拶に出向いたが、そのまま濟南市内の大明湖公園の附近にある、涮牛肉レストランに行き、學長主催の送別會に臨むことになった。出席者は、學長を始めとして我々を含めて九人である。これは、昨年（二〇〇三年）十一月、大東文化大學創立八十周年記念行事で展濤學長一行が來日した時、筆者が池袋のあるレストランで代表的日本料理と銘打って、牛肉のしゃぶしゃぶをご馳走したことがあったが、そのお返しの意味であると言う。折しも、原教授の令息の誠士氏が父親の健康を氣遣って、北京外國語大學の金曜日午前の日本語の授業終了後、飛行機で急遽、北京から濟南に駆けつけていた。その誠士氏もこの送別會に参加して、大東文化大學と山東大學の友好と交流の輪を擴げたのであったが、聞けば誠士氏も以前から山東大學とは縁が深い人である。こうして、展濤學長より心盡くしのもてなしを受けて、我々は夜九時まで、山東の春を楽しんだ。

#### 第八日、四月三日（土）

第八日の四月三日（土）は、山東大學における最後の一日であり、我々の歸國の日である。早朝五時半、鄭傑文教授が學人大厦に我々を見送りに来る。六時二十分、劉明利先生と大學の車を運轉する王さんもそろって、原教授父子と筆者の六人が乗車、七時に濟南空港に到着。山東大學の三人とはここでお別れしたが、最後の最後まで暖かいお世話を受

けて感激ひとしおであった。我々三人は直ちにMU5147便に乗りこんだ。九時十分、往きとはちがって今度は北京空港に無事到着。

三人は北京空港内のレストランで軽食を食べるなどして四時間もの間、時間をつぶしていたが、午後一時二十分、搭乗手続きの開始とともに誠士氏と別れた。二時三十五分北京発のNH906便に乗り、六時丁度、成田着。六時半、原教授は成田空港で次男夫妻の出迎えを受けた。日本、東京に歸ってみると、櫻の季節はほぼ終わっていた。

### Ⅲ 荀子墓と蘭陵

臨沂市蒼山縣蘭陵鎮の荀子墓を探訪した日程の概略は、上述のとおりであるが、ここでは荀子墓と蘭陵についてさらに詳しく述べてみたい。

荀子墓は、蘭陵鎮の中心から約一、五キロメートル東南の方向に位置している。邊り一帯はほとんどすべてが麥畑であり、荀子墓はそんな麥畑の中にぽつんと立っていた。墳丘の上にも麥が植えてあったが、これは近所の農民が勝手に植えたのであろう。ところどころには菜の花畑も点在しているという、あまり豊かとは思えない農村風景が広がっている。實際に我々は、荀子墓の直ぐ近くの農道の傍らで、一人の農家の老婆が古代さながらの大きな石臼を用いて、人力で何かの穀物を脱穀している姿を見かけて、心より驚嘆したものである。

墓域の周圍は、高さが約二、五メートル、一邊の長さが約三十メートルの正方形のコンクリートの壁で圍まれており、墓域に入る南側に門が一箇所設けられている。門を入れて北に進むと約五メートルのところに小さな亭があり、さらにその先約三メートルのところに三基の石碑が立っている。石碑の約二メートル先が荀子の墳墓である。墳墓は、黄土を

約四メートルの高さに積み重ねたもので、東西の長さが約十メートル、南北の幅が約八メートルの楕圓形をしている。墳丘の總面積は約六八〇〇平方メートルと言う。墓域全體や墳丘の上には柏樹がまばらに生えているが、みな新たに植えたものばかりであって、古くからの樹は一本もなかった。

三基の石碑についての報告は、原教授が詳しく紹介することになっているが、ここでは行論の便宜のためにその概略を記しておく。最も古い石碑は門から見て左にあり、清の道光二十一年（西曆一八四一年）に建立された「補建荀子墓碑」、次に古い石碑は眞ん中にあり、清の光緒三十年（西曆一九〇四年）に山東巡撫の周馥が建立した「楚蘭陵令荀卿之墓」、最も新しい石碑は右にあり、現代の一九七七年に山東省革命委員會蒼山縣革命委員會が建立した「蘭陵古墓」である。これらの石碑は三基ともみな比較的新しく作られたものであり、墓域も墓丘も古色蒼然たる感じがしないから、これが本當に古くから伝えられた荀子の墓であるか否か、疑問なしとしない。

その上さらに、この蘭陵鎮には、今から約二三〇〇年前に確かに存在していたにちがいない、きらびやかな學術や文化の香りがまったく香っていないのである。『史記』荀卿列傳には、

【經文】齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令。春申君死而荀卿廢、因家蘭陵。……於是推儒墨道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。因葬蘭陵。

【訓讀】齊人或いは荀卿を讒れば、荀卿は乃ち楚に適き、而して春申君以て蘭陵の令と爲す。春申君死して荀卿は廢せられ、因りて蘭陵に家す。……是ここに於いて儒・墨・道德の行事・興壞を推し、序列して著すこと數萬言にして卒す。因りて蘭陵に葬らる。

と述べられており、この文章によれば、蘭陵は戰國末期最大の儒家の思想家、荀子が家を構えて生活し死後も墓が作られて埋葬された、中國古代有數の學術都市・文化都市のほずである。筆者の心には、この地に荀子墓を探訪して以來、

釋然としないわだかまりが生ずるのを抑えることができないのである。しかしながら、このギャップは、約二三〇〇年という時の経過が然らしめたのだと考えて、とりあえずこれを荀子墓であると信ずることにしたい。儒家でも性惡説を唱えたことで有名な反正統派の荀子が、山東省の中でも孔子・曾子・孟子などの正統派と比べて、長い間不遇であったとしてもそれほど不思議ではないからである。

『史記』と『漢書』を根拠として考えるならば、この蘭陵は前漢時代初期にはまちがいなく多くの學者や人物を輩出した土地であった。『漢書』地理志によれば、「東海郡」に「縣三十八」が置かれているが、その第二として「蘭陵」が挙げられている。

まず『史記』一書をひもといて見ると、荀卿列傳に荀子が登場する以前に蘭陵という土地に言及する記事は一つとして存在していない。次に、儒林列傳を見てみると、魯の申公から『詩』を受けて景帝期に太子少傅、武帝期に郎中令となった王臧、申公の弟子で『詩』の博士となりまた長沙の内史となった繆生、廣川の董仲舒の弟子の中で『春秋』を治めて成功した楮大のことが書かれているが、彼らはみな蘭陵の出身である。

蘭陵出身の學者・人物が前漢初期に多く活躍していたことは、『漢書』によってもはっきりと確認することができる。——疏廣傳の疏廣は、『春秋』を治めた學者であり、徴されて博士太中大夫となった他、宣帝の地節三年（西曆紀元前六十七年）には太子の少傅となっている。母將隆傳の母將隆は、成帝期・哀帝期に活躍して京兆尹・執金吾などを歴任した人であるが、哀帝への奏上の中で「春秋之誼」に言及しかつ『論語』を引用している。儒林傳の、孟喜は梁の田王孫から『易』を受けた學者、その父の孟卿は『禮』『春秋』を治めた學者、母將永は『易』を沛の高相から受けた學者、王臧は魯の申公から『詩』を受けた學者（『史記』の項に既出）、繆生は申公の弟子で博士となりまた長沙の内史となった學者（『史記』の項に既出）、楮大は董仲舒の弟子で成功し後に梁の相となった學者（『史記』の項に既出）である、

等々。さらに、蕭望之傳の蕭望之は、宣帝期に左憑翊・大鴻臚・御史大夫などを歴任した人物であり、やはり蘭陵の出身であるが、後に杜陵に徙っている。彼は『齊詩』『論語』『禮服』を治めている。

このように、前漢初期に蘭陵から多くの學者・人物が輩出していた原因は何であろうか。――筆者はこれを、荀子の影響力によるものと考ええる。すなわち、荀子が弟子や孫弟子などその學派に屬する人々を引き連れて、戰國末期の紀元前二五五年に、當時全中國で學術・文化の最先端であった齊の臨淄からこの土地に移住して來、前二三八年以後間もなくここで亡くなるまで（後述）の、約二十年間に營み續けたきらびやかな學術・文化の諸活動が、前漢初期、この地に多くの學者・人物を輩出する種子を播いたのであらうと考えるのである。

#### IV 荀子の生涯と事績

荀子という思想家は、その生涯と事績の中で、いつから齊の稷下に住んでいつまでそこで活動し、また、いつごろ齊を去って楚の蘭陵に赴いたのであろうか。――これは、筆者にとって非常に難しい問題であって、正しい解答に到達することはほとんど不可能と感ぜられる。ここでは、國內外二人の代表的な研究者の見解を簡単に再構成して、それを基に若干の検討を加えることにしよう。

#### 荀子の生涯と事績に関する先行見解

一人の研究者は、日本において『荀子』の思想史的研究で多大の成果を挙げた内山俊彦教授である。内山教授の『荀子』（講談社學術文庫、講談社、一九九九年九月）は、彼の生涯と事績のアウトラインを以下のように描寫する。――

荀子は、西曆紀元前三一四年ごろ趙に生まれ、前二六五年前後、すなわち齊の襄王（在位は前二八四年～前二六五年）の末年もしくは王建（在位は前二六四年～前二二〇年）の初年に、五十歳で齊を訪れた。國都臨淄の稷下では、三度祭酒（最長老）に推されるなどして、十年ほどの期間を齊で過ごした。しかし、この國を去らなければならない運命に逢着したらしく、前二五五年、すなわち楚の考烈王（在位は前二六三年～前二三八年）の八年、荀子は齊を去って楚に赴き、間もなく春申君によって蘭陵の令に任命された。そして、考烈王の薨じた前二三八年よりあまり遠くないある年、蘭陵の地で卒した、としている<sup>[1]</sup>。

したがって、内山教授の見解によるならば、大略前二六五年前後～前二五五年の十年間、齊の稷下で活動し、また前二五五年～前二三八年より少し後の十數年間、楚の蘭陵で生活していた、ということになる。

もう一人の研究者は、この種の問題で先驅的な仕事を遺した錢穆教授である。錢教授の『先秦諸子繫年』は、内山教授とは大分異なった生涯と事績の年代を設けている。——荀子は、紀元前三三九年ごろ趙に生まれ、前三二五年ごろ、すなわち齊の威王（在位は前三五七年～前三二〇年）の晩年に、十五歳で初めて齊に游學した。前三二〇年ごろ、すなわち燕王噲（在位は前三二〇年～前三一六年）の元年に一旦齊を離れて燕に赴いたが、やがて前三一六年ごろ、燕を去って齊にもどり、その後、齊の稷下の列大夫となった。前二八六年、すなわち齊の湣王（在位は前三〇〇年～前二八四年）の十五年乃至十六年の間に、讒言に遭ったために齊を去って楚に移り、やがて前二八四年ごろ、蘭陵の令に任命された。その後、襄王（在位は前二八三年～前二六五年）の時代になって、前二七八年ごろ、再び齊の稷下にもどってその老師となった。以後、襄王が薨ずるに至るまで三度祭酒となっている。前二六五年、襄王が薨じて王建が即位すると、荀子は齊を去って秦に遊び、前二六一年ごろ、秦より生國の趙に歸った。前二五七年、趙の孝成王（在位は前二六五年～前二四五年）の前で兵を議したところまでは、荀子の生存を確認することができるが、その後の存否は不明であって、弟



子の李斯が秦に入った前二五七年乃至前二四七年にはすでに卒していたようだ、とする。<sup>2)</sup>

それゆえ、錢教授によれば、前三二五年ごろ～前三二〇年ごろ、前三一六年～前二八六年、前二七八年ごろ～前二六五年の都合三度、合計約五十年間齊に滞在し、また前二八六年～前二七八年ごろの九年間を楚で過ごした、ということになる。

ただし、錢教授の以上の見解は、資料操作の上で相當の無理を犯した後に得られたものである。

第一に、錢教授は、かなり信頼することのできる古い資料である『荀子』『韓非子』『史記』などの記事と、それに比べれば信頼性の劣る後の資料である劉向『孫卿書錄』『鹽鐵論』『風俗通』などの記事とを、資料的價值の上で同列に置き、それらを恣意的に引用して荀子の生涯と事績を畫いている。

第二に、錢教授は、『史記』荀卿列傳に、

【經文】荀卿、趙人。年五十始來游學於齊。

【訓讀】荀卿は、趙人なり。年五十にして始めて來たりて齊に游學す。

とある記事の中の、荀子が齊の稷下に游學した年齢の「五十」を誤りとして「十五」に改める。また、この「游學」の年代を、『史記』荀卿列傳の文脈を無視して「威王晩世」であると認める。その結果、荀子を非常な長壽者として畫かざるをえない不合理に陥っている。

第三に、『史記』荀卿列傳に、

【經文】齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令。春申君死而荀卿廢、因家蘭陵。李斯嘗爲弟子、已而相秦。

【訓讀】齊人或いは荀卿を讒れば、荀卿は乃ち楚に適き、而して春申君以て蘭陵の令と爲す。春申君死して荀卿は

廢せられ、囚りて蘭陵に家す。李斯嘗て弟子と爲り、已にして秦に相たり。

とある記事の中の、荀子についての楚關係の記事をほとんど信賴せず、それを文字どおりには受け取らないために、荀子と楚・春申君・李斯との關わりを輕視したり、明文のある「因葬蘭陵」を退けて生國の趙に歸つて卒したと述べたりといった、珍奇な見解を提示するに止まっている。

### 荀子の生涯と事績

荀子という思想家について初めてまとまった傳記を書いたのは、『史記』荀卿列傳である。上述のとおり、荀子の生涯と事績を畫くための資料には、比較的信賴することのできる古い『荀子』『韓非子』『史記』などを優先的に採用すべきであるが、中んづく『史記』荀卿列傳は最も優先的に検討されなければならない。

ここでは、主に『史記』荀卿列傳の記事から資料を採用して、試みに荀子の生涯と事績を略述してみる。

【經文】荀卿、趙人。年五十始來游學於齊。騶衍之術迂大而閔辯。爽也文具難施。淳于髡久與處、時有得善言。故齊人頌曰、「談天衍、雕龍爽、灸轂過髡。」田駢之屬皆已死齊襄王時、而荀卿最爲老師。齊尙脩列大夫之缺、而荀卿三爲祭酒焉。齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令。春申君死而荀卿廢、因家蘭陵。李斯嘗爲弟子、已而相秦。荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信禩祥、鄙儒小拘、如莊周等又猾稽亂俗。於是推儒墨道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。因葬蘭陵。

【訓讀】荀卿は、趙人なり。年五十にして始めて來たりて齊に游學す。騶衍の術は迂大にして閔辯す。爽や文具わるも施し難し。淳于髡は久しく與に處れば、時に善言を得ること有り。故に齊人頌して曰わく、「天を談ずるは衍、龍を雕るは爽、轂過を灸るは髡なり。」と。田駢の屬は皆な已に齊の襄王の時に死して、荀卿最も老師爲り。齊は

尙お列大夫の缺を脩めんとして、荀卿三たび祭酒と爲る。齊人或いは荀卿を讒れば、荀卿は乃ち楚に適き、而して春申君以て蘭陵の令と爲す。春申君死して荀卿は廢せられ、因りて蘭陵に家す。李斯嘗て弟子と爲り、已にして秦に相たり。荀卿は濁世の政、亡國・亂君相い屬き、大道を遂げずして巫祝に營わされ、襪祥を信じ、鄙儒は小拘し、莊周等の如きは又た滑稽にして俗を亂すを嫉む。是に於いて儒・墨・道德の行事・興壞を推し、序列して著すと數萬言にして卒す。因りて蘭陵に葬らる。

この記事を根據にするならば、荀子の生國は、趙である。生年は、前三一五年前後であろう。——彼が齊に「游學」した年代が、下文から襄王（在位は前二八三年〜前二六五年）の末年か、あるいは次の王建（在位は紀元前二六四年〜前二二〇年）の初年、すなわち前二六五年あるいは前二六四年であると判断されるので、ここから逆算して「五十」年前にさかのぼると、前三一五年前後という年代を得るはずである。

始めて齊に游學したのは、「年五十」の時である。錢教授がこの記事を「年十五」の誤りと疑うのは、むしろ錢教授の誤りである。

と言うのは、一つには、もし正しくは「年十五」であるならば、『史記』荀卿列傳は、諸他の列傳の書法にならって、趙における荀子の早熟な秀才ぶりを描寫してもよさそうなものであるが、そのような描寫が全然書かれていないからである。<sup>【3】</sup>

二つには、錢教授は、荀子が以後、再三にわたって齊に赴いた事實を念頭に置いて、司馬遷は「始」ということばを使っているのだと解釋するが、これも誤っている。この「始」は直ぐ下の「來游學」に係る副詞であり、彼が再三齊に「來游學」した事實はないからである。やはりこれは、「年五十」になって中國の學術・文化の最先端、齊の臨淄に留學にやってきたという、荀子の並はずれた晩學と、さらには熱意を強調することばと解釋しなければなるまい。

三つには、「年五十」をそのままにして忠實に解釋するならば、それは下文に、

【經文】田駢之屬皆已死齊襄王時、而荀卿最爲老師。

【訓讀】田駢の屬は皆な已に齊の襄王の時に死して、荀卿最も老師爲り。

とある記事と、適合的な年齢設定と思われるからである。

この游學は、今見たように、『史記』荀卿列傳に、

【經文】田駢之屬皆已死齊襄王時、而荀卿最爲老師。

【訓讀】田駢の屬は皆な已に齊の襄王の時に死して、荀卿最も老師爲り。

とある記事によって、襄王の末年もしくは王建の初年、すなわち前二六五年か前二六四年と判断される。この時より以後、前二五五年に至るまで、荀子は基本的に齊で生活し、その間、最長老と尊ばれ、「列大夫」に任ぜられ、三度「祭酒」となったのであった。

ところが、ある齊人の讒言に遭ったために、荀子は齊を去って楚に適き、春申君の庇護を受けて蘭陵の令に任命された。この間の事情を、『史記』荀卿列傳は、

【經文】齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令。

【訓讀】齊人或いは荀卿を讒れば、荀卿は乃ち楚に適き、而して春申君以て蘭陵の令と爲す。

と述べている。『史記』春申君列傳にも、

【經文】春申君既相楚、是時齊有孟嘗君、趙有平原君、魏有信陵君、方爭下士、招致賓客、以相傾奪、輔國持權。

春申君爲楚相四年、秦破趙之長平軍四十餘萬。五年、圍邯鄲。邯鄲告急於楚、楚使春申君將兵往救之、秦兵亦去、

春申君歸。春申君相楚八年、爲楚北伐滅魯、以荀卿爲蘭陵令。當是時、楚復彊。

【訓讀】春申君既に楚に相たり、是の時齊に孟嘗君有り、趙に平原君有り、魏に信陵君有り、方に争いて士に下り、賓客を招致して、以て相い傾奪し、國を輔け權を持す。春申君楚の相と爲りて四年、秦趙の長平軍四十餘萬を破る。五年、邯鄲を圍む。邯鄲急を楚に告げ、楚は春申君をして兵を將いて往きて之を救わしむれば、秦兵も亦た去り、春申君歸る。春申君楚に相たること八年、楚の爲めに北のかた伐ちて魯を滅ぼし、荀卿を以て蘭陵の令と爲す。是の時に當たりて、楚は復た彊し。

という文章がある。これによれば、荀子が楚に適き蘭陵の令となったのは春申君が楚の相となった八年、すなわち前五五年のことである。

やがて前二二八年、春申君が李園によって殺される事件が起こったため（『史記』春申君列傳）、『史記』荀卿列傳に、

【經文】春申君死而荀卿廢、因家蘭陵。

【訓讀】春申君死して荀卿は廢せられ、因りて蘭陵に家す。

とあるように、庇護者を失った荀子も蘭陵の令を解任されてしまう。以後は、そのまま蘭陵に家を構えて餘生を送りこの土地で卒したのであるが、卒年は不明。『史記』荀卿列傳には、

【經文】於是推儒墨道德之行事興壞、序列著數萬言而卒。因葬蘭陵。

【訓讀】是こに於いて儒・墨・道德の行事・興壞を推し、序列して著すこと數萬言にして卒す。因りて蘭陵に葬らる。

とあり、これによれば、荀子は死後「蘭陵に葬られ」たのであるから、彼の墓は蘭陵にあったはずである。

以上は、筆者が主に『史記』の記事を資料に採用して、荀子の生涯と事績を略述したものであるが、先に紹介した内

山教授の見解が正しいことを確認する結果となった。<sup>4)</sup>——原教授と筆者が見學したこの荀子墓は、紀元前二五五年～前二二八年より少し後の十數年間、荀子がこの土地できらびやかな學術・文化の諸活動を展開していた名残りを現代に伝える資料だったのである。

注

【1】 内山俊彦教授『荀子』、I章「荀子の生涯とその時代」、2「戰國最後の儒家——荀子の生涯」、「姓名・生年」「齊國にて」「蘭陵の令」「晩年と死」、三十九頁～四十一頁、四十九頁～五十一頁、五十四頁～五十六頁、六十三頁～六十五頁。

【2】 錢穆教授『先秦諸子繫年』（上册・下册）（香港大學出版社、一九五六年六月増訂初版）、一〇三「荀卿年十五之齊攷」、一三六「荀卿自齊適楚攷」、一四〇「春申君封荀卿爲蘭陵令辨」、一四三「荀卿齊襄王時爲稷下祭酒攷」、一四九「荀卿赴秦見昭王應侯攷」、一五一「荀卿至趙見趙孝成王議兵攷」、一五六「李斯韓非攷」、三三三頁～三三五頁、四二四頁～四二五頁、四三二頁～四三四頁、四三七頁～四三八頁、四五八頁～四五九頁、四六〇頁～四六一頁、四七七頁～四八〇頁。

【3】 劉向『孫卿書錄』が、

【經文】 是時、荀卿有秀才、年五十、始來游學。

【訓讀】 是の時、荀卿に秀才有り、年五十にして、始めて來たりて游學す。  
と畫くのは、後代の潤色が加わったものと考えるべきであろう。

【4】 ちなみに、現代日本における『荀子』研究の先驅者である重澤俊郎教授の『周漢思想研究』（弘文堂書房、一九四三年八月）、『荀況研究』、『荀況の稱號年代著作等に就いて』、四十九頁～五十五頁が、すでにほぼ同じ見解を表明していた。